

【高等学校の部】優秀賞

私はまた、舞台の上に。

大分県立別府翔青高等学校 3年

安部 瑠美

目の前は真っ暗なのに、たくさんの視線が私に刺さる。太陽とは違う、スポットライトの熱が降りそそいでいる。足はすくんで震えているのに、逃げ出すことは許されない。唯一の救いは、祖母が優しく微笑んで、隣で座って見守ってくれていること。私は、暗闇からの視線から逃げるように、祖母を見つめて立ち上がった。

これは、私が二歳の時の初舞台のことです。何の舞台かという、日本舞踊のジャンルの一つである、新舞踊という踊りです。多くの人が想像するように、日舞と同じく着物を着て、日本髪にかんざしをさして、傘や扇子、手ぬぐいやうちわを持って踊ります。

さて、なぜ私がこの新舞踊を習っているかという、「生まれた家がこの家だったから。」としか言いようがありません。祖母はこの新舞踊の先生をしています。そして、同じ家に暮らしていて、稽古場も自宅の一室なので、私が踊り始めることになったのは自然なことでした。ようやく前を向いてしっかりと歩けるようになった一歳の時、最初は祖母の踊りを真似するところから始まりました。次第に、着物に袖を通し、足袋をはき、自分の踊りを毎週お稽古するようになったのは、単純に踊りが好きで、楽しくてたまらなかつたからだと思います。毎週のお稽古は、一年に一度、祖母の会（チームのようなものです）が主催するおさらい会で発表するためにしているのです、当然私も自分一人で踊らなければなりません。その、記念すべき初舞台を、私は二歳で踏むことになったのです。舞台から見た風景を、今でも覚えています。

その、初舞台を踏んだ二歳からは十六年経った今も、毎週お稽古を続けています。そして、今年も私は舞台に立つのです。優しい祖母、というよりも、尊敬する憧れの先生という存在になるほどの年月を、この新舞踊と過ごしてきました。その中で、一度も踊りをやめたくなくなったことはないのか、と言われれば、そんなことはありません。部活動と勉強の両立に加え、お稽古もしなければならなくなった中学生の時。高校に入ってお稽古の時間帯が金曜日の夜から土曜日の昼に変わり、休日に友だちと遊びに行けない時。些細なことですが、お稽古の時間がなければ、と思うことはあったのです。思い切って、それを祖母に相談したこともあります。そうすると、祖母は毎回

「せっかくここまで続けてきたんやから、もうちょっと考えよ。あんたの踊りを楽しみにしてくれてるお客さんもおるんよ。」

と言ってくれました。辛かったり、振りがうまくできなくて泣いたりしたこともあるけど、今こうやって私の踊りが求められていて、そこにやりがいも感じていて、簡単にやめてしまうのは悔しいと思っている自分に気づくのです。それに、一緒に踊りを始めた親戚の姉の存在が、踊りを続ける上ではとても大きく、次は一緒に何を踊ろうと言われると、そうだなあと進んで踊りに取り組んでしまうのです。好きなことは、好きという感情がなくなる前にやめてしまったら、後悔しか残りません。悔いのないように、これからは踊りと向き合っていこうと改めて思いました。

私には夢があります。それは、尊敬する祖母と一緒に舞台に立つことです。そのためには、もっと技術を磨かなければなりません。祖母が先生を続ける限り、私は全力で舞台に立ちたいと思います。